

詩時評

第40回

真善美を忘れた
暗黒時代にしては
ならない

松本衆司

アメリカの大統領が再びトランプとなった。嘗てと同じ思いがよぎる。五年前の第二十回詩時評の冒頭の一部を再掲する。「岡潔と小林秀雄の対談『人間の建設』の中に、岡潔と小こんな発言がある。『世界の知力が低下すると暗黒時代になる。暗黒時代になると、物のほんとうのよさがわからなくなる。／真善美を問題にしようとしてもできないから、大きな社会と結びつけて考える。それしかできないから、それをしようになる。それが功利主義だと思えます。』——差別主義、金権主義、国粹主義、保護主義をディールという名の下で標榜する人物を世界はどのように評価するのか。今、世界の知性が問われている。

浅見洋子日英詩集『独りぼっちの人生』東

京大空襲により心をこわされた子たち——
（コールサック社）を読む。原告一三一名による東京大空襲裁判に於ける当時子供だった六人の方の聞き取りを記したものである。

弁護士原田敬三による跋文の一部を引く。
「六十六年前の孤児らは、両親の庇護を失い、人生最大の被害を被りながら、国の救済対象にされることなく、放置され無視された。（略）ちなみに、彼女らに国家が取った施策は唯一、『浮浪者狩り』と言われる理由なき収容と虐待であった。当時の新聞を読むと、孤児らは、はじめは憐れみの対象として、ついで戦後の風物詩として、つぎに取り締まりの対象として、社会が向き合っていた事が窺われる。『上野の孤児に食べ物をあげないでください』と呼びかける政府の閣議決定（一九四八年九月七日）を伝える新聞記事はあっても、孤児救済のキャンペーンは世論の関心対象とはならず、ヨーロッパのような救済立法は制定されなかった。』

「夕日」を引く。

——私は 今でも 夕日が 嫌いです／
語気を強め 言い切る 石川智恵子 六九
歳／東京大空襲訴訟で 証人尋問にたつ
彼女／打合せ場所を わが家にした 代理
人の夫／二人の 傍らで 茶を入れながら
／彼女の話を 聞き入った／三月一日

六歳の誕生日をむかえた 智恵子は／深川
で 三月一〇日の 東京大空襲にみまわれ
／両親と 二人の兄弟を 亡くしたと言
／あの日 一二歳の姉に 背負われ 智
恵子が 目にした 光景とは 焼けて小
さくなった 黒い死体が 道いっばいに 折
り重なり 人が歩ける分だけ 脇にどけら
れていた まさに 地獄だったと言
／一二歳の長女と一〇歳の長兄 智恵子が生
き残った 翌日 三人は 別々の親戚に
引き取られた その日から 智恵子の 孤
独との 戦いが 始まった 六歳の智恵
子は 労働力には ならない 役に立たな
い 彼女の 食事は 小さい芋 一個か
い 握りのご飯だけ みそ汁の 味も 新
香の 味も 知らないでいた 家に 居
場所を 持たない 智恵子は 夕日に 向
かい お父ちゃん！ お母ちゃん！ 一人
泣きながら 叫んでいたと言 土手
の夕日が 沈むころ そとへ帰り 部屋の隅
に 隠れるように 座っていたと語る
／小学校に入った 智恵子に 姉の居場所が
知らされた 学校で 必要な 一切を 姉か
ら 貰うために 給金を貰い 食べることも
できていた 長く延びた 黒い影が 田
畑にとけこみ 夕日の落ちた あぜ道を
智恵子は 姉の所に いかなくて 心

細さに ふるえ 涙をこらえ 一心に／歩いたものだどと話した／明るい時間に／姉の所に着くと／家に帰されるので／夕日を背に／暗くなってから／辿りつくようにと／子どもなりの／知恵だったと／苦笑した／六三年経った いまも／夕日は 智恵子を／幼い日の 不安で／寂しかった日々にと／引き戻す

——Even now, still, I'm not too fond of sunset. / She goes on to say in a hushed tone, Chieko Ishikawa, who was a sixty-nine-year-old woman. / She stands in court to question witnesses for the Tokyo Air Raid.....

左頁に日本語で、右頁に英語（岡和田晃訳）で書かれたこの詩集は、東京大空襲時、幼かった六人の方の悲痛な証言とその後の筆舌に尽くしがたい人生の聞き取りによる詩である。米軍の東京への空襲は三度繰り返され、東京市街地の六割が焦土と化し、死者は推定十万人以上という。その理不尽極まる空襲により家族の命を奪われ、生きる術を持たない戦争孤児は、東京のみならず全国に三万人以上という……。だが、今日もこのような戦争・空爆による悲劇は地球上に続く。何人たりとも人の人生を奪う権利などないのに、

愚かな為政者たちは自らを正当化し、国際法を無視し、無辜の民の人命を顧みない。私たちは平和を構築する民主主義と人道主義の名において市民の生きる権利と暮らしを守らなければならぬ。それこそが多くの悲惨と絶望を経験した過去の歴史を背負う人類の、未来への使命であるはずだ。真善美を忘れた暗黒時代にしてはならないのだ。

寒美千子詩集『水の時』、『星の時』（ロクリン社）を読む。「VOICE of St.GIGA」と副題がついている。九一年から九七年に衛星放送ラジオ局「セント・ギガ」に書いた六百余篇の中から選んだ二四一篇を二冊の詩集に収めたものだ。『水の時』より『The Rising Sun』を引く。

太陽が／わたしに さわりたがる／水平線の向こうから／その透明な光の手を伸ばし／海と空との境目にさわり／はるばると海をわたる波にさわり／波の碎ける渚にさわり／渚によせる貝殻にさわり／珊瑚の碎けた砂にさわり／砂の撒かれた小道にさわり／草に咲く花にさわり／花に結ぶ朝露にさわり／朝露に濡れた爪先に／いま さわつたと思つたとたん／わたしを まぶしく抱きすくめる／触れたものすべてを／淡い金色に輝かせながら

「セント・ギガ」はベイラジオの試みで、CMも時報もニュースもDJもなく、宇宙からの視点で月齢と潮の満ち干の組み合わせによって音楽と自然音が選ばれ、音の潮流として生放送される番組で、人の声はほとんどジングルと詩の言葉だけ。そのジングルロゴは「わたしはここにいます。あなたがそこにいてよかった」というカート・ヴォネガットの言葉である。この寒美千子の選んだ言葉が、放送局と番組を立ち上げた人々の「地球という星を、衛星の視点から見た言葉を贈りたい。争いと悲しみに満ちた地球だが、宇宙から見たら国境もない。小さな鏡となって、地球に美しい音だけを反射させたい」（『星の時』「あとがき」という番組の崇高な志に合致し、日々の放送に右のような詩篇とともに寄り添う。ラジオ局は〇三年に終了したという。このような詩的な試みは営利本意の現実には受け入れられないが、それ故、現実を生きることに追い詰められた人々の心に拠り所になるのだ。

内藤ねり詩集『耳にフーツ』（ワーズ）を読む。「しゅらしゅしゅしゅ」を引く。

目隠しなんか／せんといて／どうせ／いつもと同じとこで／あんた／見失うもん／

／生玉坂、／口繩坂、／愛染坂、／逢坂、
／もう追いかけたら／あかん／／うちのか
らだが／足の裏から／ぬめぬめと／蛇にな
りよる／めらめらと／鬼になりよる／／寂
夜／／変わり果てた／餡色の／修羅になる
ねん

三二篇の初出一覧を見ると、九四年から近
作までの三十年という長い時間が収められて
いる。いずれの作も、恋うる女の一途さを右
の詩のように、また「ふかみどりの／やみの
なかで／あいははじまり／たましいのまま／
むさぼりあった」（「ぼるねお紅子」）のご
とくに、その振り絞る情念を描いている。近
世、世話物や心中物の人形浄瑠璃に、市井の
人々が心震え、涙したのも、そこに苦界を生
きる切なさの極みの風景を見たからであった
が、近松の『心中天の網鳥』の（名残の橋尽
し）ならぬ天王寺七坂のくだりなど、切なく
も愛おしくも禍々しい女心の極みを語る内藤
ねりの文芸の可能性をこの詩集に見る。

詩誌『タルタ』六十五号を読む。図師照幸、
浅野牧子、柳岡加奈、井上和之、寺田美由記、
堀内敦子、田中裕子、高澤静香の同人作品一
二篇に今号は先田督裕が詩とエッセイが掲載
されている。いずれも人生の思いを重ねてき
たその歩みの中で生まれた詩篇である。田中

裕子の「転ぶ」を引く。

ああ つかれた／口にした途端つまずいて
／ころぶ と思ひながら 転ぶ とはかけ
離れた棒の形で／ゆっくり 倒れた／内臓
が跳ね上がり／バウンド／顔は地面を舐め
んばかり／大丈夫ですか 女子高生が足を
止めてくれて／大丈夫です とひねり出す
／恥ずかしくて ありがたかった／ズボン
の下 膝がケガをしていた／眠い／しつ
こい重さを引きずりながら歩いていたら
／唾まと思ひながら同じことになった／バ
スターミナルの人人人の視線／起き上がり
ないわけにはいかない／ゆっくり 立ち上
がって 汚れをばらう／なぜか恥ずかしさ
はなく 少しかなしかった／ひとりだけ地
球の自転を止められたような腹立ち／スカ
ートが新しいキズにふれてヒリヒリする／
／つまづく物は何もない／そんなことがあ
るのかと頭は考えなが／体はそんなふうな
のだ／／思うことはいつも追いつかない
／失敗が重なる／そんな人っているからね
／おらかな対応にうろたえる／目を開け
ると帰りの電車は終点を折り返していた
／降りなければ／このまま行ってしまおうわけ
にはいかない／手すりにつかまって階段を
下りてまた上る／一段 一段 そんな人にな
りつつ／／上り下りの／ホームにはさま

れた狭い空を／白い雲が連なって走る／遠
くの方が／茜色に染まりはじめた／時間が
しぼられていく／／思うことが／追いつい
たら／もう立ち上がれないかもしれない
／季節の風などに吹かれて 私／どこかに転
がっているかもしれない

詩の世界にあっても高齢化が進んでいる。
だが、この世界の高齢化は大いに面白い。体
力分野とは異なり、詩は人生と向き合う心の
産物である故、高齢化により今まで読んだこ
ともない熟成された人生の作品が生まれる。
この詩も見事だ。「目を開けると帰りの電車
は終点を折り返していた／降りなければ／こ
のまま行ってしまおうわけにはいかない」、こ
の老いの切実感に、思わず立ち止まる。

『コールサック』は二二一号を数える。八
七年創刊より詩と評論の雑誌だったが、二〇
〇六年以降、季刊総合文芸誌としての使命を
担いつつ、短詩系文学の魅力の紹介と顕彰を
期している。代表鈴木比佐雄はその姿勢の根
底には「宮沢賢治の精神」があると言う。多
様性や他者を認め、平和主義、地域文化、自
然、そして自由な精神、そのいずれをも蔑ろ
にしない——「賢治の精神を引きつぎ、同時
代で宮沢賢治のような精神の方の作品をこの
雑誌に集めて応援したい」と言う。改めてそ

の志の尊さを思う。

今号の扉詩、浅山泰美「聴雪」を引く。

思いがけず／彼岸の雪の朝／雲隠れしていた愛猫が帰ってくる／浅い夢の中／濡れている毛並み。／忘れていたのは誰だろう／世界が眩ゆくうつくしいことを。／どうして／ずっと忘れていたのだろう／それ／今になって 何故／思い出したのだろう／誰かの笑顔のように。／朝日のなかで／小鳥たちの囀りが／白くきらめきながら地に降る／物語はすでに終わっていた／始まるずっと前に。／彼岸明けの日 夜半の雨に／開きかけた白木蓮が濡れている／清らかな涙のような雫に宿る／この世のすべて。／ふる雪を聴いてきた者だけに訪れる／春があることに ようやく／気づく

彼岸に名残の雪が降る。その雪の情景に、夢とうつつの、今と昔日の、心の光と影が重なる。その不思議な時の「雫」のようなひとときが描写される。誰もがふと思うそのようなひととき、浅山泰美の詩が光る。

『お家の読書会2022.23—新型コロナウイルス期読書会の試み—』山村由紀編著（人間社×草原詩社）を読む。感染予防のため人との接触をできる限り避けるコロナ禍の間に、顔を合わ

せない読書会の試みとして、山村由紀の選んだ詩集を二ヶ月に一冊、折口立仁、川鍋さく、平居謙が順次読み、その四人の個性豊かな感想と批評をブログに発表したものである。

取り上げられた七冊の詩集は、たなかよしゆき詩集『コッソカッソ』（文文舎）、竹内敏喜詩集『魔のとき』（水仁舎）、江口節詩集『水差しの水』（編集工房ノア）、望月遊馬詩集『燃える庭、こわばる川』（思潮社）、松本衆司詩集『破れ』（ひかり企画）、杉本真維子詩集『皆神山』（思潮社）、小網恵子詩集『不可解な帽子』（水仁舎）。

「この本は『知る詩る読書の会』のこれまでの記録と、人が自由に出会えない状況のなかで新たな読書会の在り方を試みた四人の記念碑の一冊です」（「はじめに」と、山村さんは言う。そして、「おわりに」の最後では「良い詩集がもっと多くの人に読まれますように」と、締めくくる。詩に寄せる熱い思いの結実としての一冊である。

『私と大阪文学学校』（大阪文学学校・中塚クラス）を読む。木曜昼詩・エッセイ中塚クラスのクラス雑誌である。その最終頁にある中塚鞠子の「お別れとお礼のことは」より。

…大阪文学学校との関わりは、一九六五（昭和四〇）年青井鞠子として入学した時

から始まります。…略：子育ての時期は保育所もない時代でしたので家にいましたが、岸和田図書館で「友の会」を立ち上げ「詩の教室」を作って、詩を書いていました。

文学学校で担当だった倉橋健一さんが講師で来て下さって今年で四十三年、それはまだ続いています。…略：龍生さんに詩のチューターをしないかといわれてチューターになったのは二〇〇六（平成十八）年四月でした。みなさん希望に燃えて、ぐいぐい押し迫ってくるような感じでした。／私の一生にとって、文学学校のチューターとして過ごした十九年間は、詩やエッセイを書く仲間と時を共に過ごしたという感じの楽しい日々でありましたが、実は大変人生勉強になり、貴重な経験をした期間でもありました。…略：…

木曜日はずっと、昼の詩・エッセイクラスの担当が中塚さんで、夜の詩・エッセイクラスの担当が私。その入れ替わりの時間にお目にかかれることをなんとなく楽しみにしておりました。もうその小さな出会いのひとときがなくなるのですね。中塚さん、十九年間の文校チューター、お疲れさまでした。中塚鞠子の詩文学への直向きな姿勢と文学学校との六十年に心より拍手を送ります。